

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム（2002.12）3巻1号:20-28.

【旭川医科大学カリキュラム改革の現状】 旭川医科大学英語カリキュラム改革 教養英語から医学英語へ

内藤永

特集：旭川医科大学カリキュラム改革の現状

旭川医科大学英語カリキュラム改革—教養英語から医学英語へ

内 藤 永*

【要 旨】

旭川医科大学では1999年度から大幅にカリキュラムを改革した。本稿では、英語教育の歴史的背景、教育目標、授業実践、学生の評価に触れつつ、英語のカリキュラム改革について報告する。そして、特定の目的のための英語 (English for Specific Purposes) としての医学英語を導入するこのカリキュラムが、医学の研究・実践に必要な読み書き能力・発表能力を向上させる先進的、かつ実践的な取り組みであることを示す。最後に、このカリキュラムでは教養英語には力点が置かれないものの、学生は職業上円滑なコミュニケーションを図る上で、英語にまつわる広範囲な知識が必要となることを指摘する。

はじめに

1991年(平成3年)に行われた大学設置基準の大綱化により、各大学では授業科目の区分や卒業要件単位数を弾力的に編成することが可能となった。これを契機に日本では大学改革が行われ、各大学では教育課程を再編成し、かつて分離していた教養教育と専門教育を一貫したカリキュラムの下で教育する大学が増えている。このような全学部を対象とした変革の波に加えて、医学部では21世紀の医学を取り巻く状況を見通して、カリキュラムの策定、課題探求能力の育成、臨床実習の充実など、学部教育の内容と方法を根本的に見直す方向で大学改革が進んでいる。これらの二つの大きな流れを踏まえ、旭川医科大学においてもカリキュラムの抜本的見直しが行われ、医学科では1999年(平成11年)度入学者から新しいカリキュラムの下で教育が行われている(看護科においても2000年(平成12年)から新しいカリキュラムが施行されたが、英語に関しては医学科と看護科では目標、教育方法、スタッフ構成が異なるため、ここでは医学科のみに話題を絞ることとする)。この新しいカリキュラムでは、一般教育、基礎医学、臨床医学の区分を超えた

授業科目が多数開講され、学生の主体性を引き出す授業内容、学際的研究分野の成果を教授できる授業編成が展開され、高度な知識と技術を持ち合わせた医療人の育成が行われている。

旭川医科大学のカリキュラム改革では一般教育の科目であった英語についても改変が行われた。この改変にあたっては、旭川医科大学学内に設置された教育課程編成小委員会の委員(臨床医学、基礎医学の教官)と英語教官との間で議論を重ね、医学と英語教育、各分野の現状とニーズに見合う授業が展開できるよう配慮した。新しく作成されたカリキュラムの特徴を端的に述べると、英語関連科目の履修期間が大幅に延長されて学生が英語に触れる機会が増えたこと、さらに、基礎医学、臨床医学の教官が英語教育に携わることで医学の専門的な内容に踏み込んだ教育が可能となったことである。このカリキュラム改革の目標とするところは、医学論文の読解能力を養成すること、それに加えて、専門分野について英語で討論、発表し、論文を執筆する、いわゆる情報発信型の能力を育成することである。この改変によって従来の教養を重視した英語教育から医学の専門的内容を重視した英語教育へと教育方針が大きく転換された。それに伴い科目の名称を

* 旭川医科大学 英語

「英語」から「医学英語」に改めることになった。

ここでは、まず初めに、明治から現代に至るまでの英語教育の変遷を概観した上で、この新しい英語カリキュラムが作られた時代背景とその意義を考察する。次に、新しいカリキュラムの下で行われる医学英語の授業展開、授業内容について旧カリキュラムとの相違点を指摘しつつ紹介する。一部の授業についてはその実践報告を行い、学生が新しいカリキュラムの授業をどのように受け止めているのかを見る。最後に、今回のカリキュラム改革で削られた「教養英語」に触れ、今後取り組むべき課題について管見する。

1. 英語教育の変遷

英語が日本の教育現場に本格的に登場するのは、西洋文明の成果を日本に取り入れることに熱心であった明治時代のことである。明治前期においては、英語、ドイツ語、フランス語などの外国語は西洋を知るための必須手段であった。近代教育の制度が整備され、高等教育機関が設立されていくが、当時は日本語で執筆された教科書は数少なく、外国の教科書をそのまま使用することが多かった。また、講義を担当できる日本人教師が少ないため、海外から招聘された外国人教師が外国語で授業をしていた。そのため、高等教育機関で学問を学ぶためには、相当の外国語運用能力が必要であった。官立の外国語学校（後に英語学校に改称）が東京、愛知、広島、新潟、宮城、大阪、長崎に設立されるなど、国の政策として外国語教育に力を入れていた時代である。そのような時代背景だけに、当時の学生は外国語に堪能な者が多く、著名な外国語の達人が輩出された。^{1) 2) 3)}

明治時代も後期になり、日本人教師が養成され、日本語の教科書が作られ、自前で高等教育を施すことができるようになると、日本の外国語教育の政策は大きく変化した。1894年には時の文部大臣井上毅によって「英語の教授以外には、出来る丈日本語を用いる」との方針が打ち出された。この時期から学生の語学力は急速に衰え、外国語も西洋の学問を学ぶための手段から、外国文学を学ぶための素養と変化した。中学校において外国語が必修科目になると、高等教育機関進学を選抜試験に用いられるようになり、「受験英語」なるものが登場するなど、実用性とはかけ離れた英語教育が行われるようになった。明治終わりから大正、

昭和にかけて国力が強まり、戦争の時代へと突入すると、外国語無用論、廃止論が台頭し、いよいよ外国語教育は規模が縮小されるようになった。太平洋戦争の時期には、英語は敵国語とみなされ、和製英語の禁止、英米人教師の解職、英語教科書の検閲強化などが行われた。¹⁾

太平洋戦争敗戦後、日本の教育制度は大幅に簡略化され、大学はアメリカをモデルとした教養教育重視型の制度が敷かれることになる。これはそれ以降の外国語教育を大きく変える制度であったように思う。当時、中学校を卒業してからの高等教育については、太平洋戦争以前の教育制度を踏襲する二つの道が考えられていた。一つは、日本語だけで学べる専門学校道、もう一つは、高等学校、予科で語学を勉強してから大学へ進学する道である。このような二本立ての高等教育制度の方が当時支配的な考え方であったようであるが、結局、高等教育は高等学校と新制大学とに一元化された。⁴⁾ この制度改革の中で、外国語は、高等学校において事実上の必修科目となり、大学においても一般教育科目とは別枠の必修単位となった。かくして、戦争の時期に下火となっていた外国語教育が復活したが、これまでと異なり、高等教育の一元化によってより多くの学生が英語を必修科目として学ぶことになった。国としてさしたる外国語教育政策もなく、外国語を学習しなければならない差し迫った必要性も見いだせない状況では、緊張感のない、実用性とかけ離れた外国語教育が続いたのもやむを得ないことに思える。中等教育では当面の目標を立てるために受験対策としての英語が重んじられ、高等教育においてはいわゆる教養として訳読中心の授業が盛んであった。実践的語学を必要とした場合には、その習得は個人の努力にゆだねられるというのが実情であった。

平成に入る頃の時代は、国際化、情報化が加速し、それに伴い実践的英語の必要性が真剣に論じられるようになった。大量輸送機関の発達により海外へ赴く人の数は爆発的に増え、実際に外国語を使用しなければいけない場面が増えた。マルチメディアの発達によって、日本国内にいたまま、海外の生の情報を手にすることが手軽にできるようにもなった。状況の変化は、学問分野にも及び、国際学会への参加、発表の機会が増え、かつて月単位、あるいは年単位の遅れで入ってきた最新の論文や情報もリアルタイムで入手できるようになった。このように各方面でグローバル化が進行

する中、とりわけ共通語としての英語のスキル向上が説かれるようになった。それを受ける形で、また、大学設置基準の大綱化で教養としての英語教育に拘束される必要がなくなったことで、英語教育の研究分野では大きな変化が起きた。教師が教授内容を決める教師中心の英語教育から、学習者のニーズを分析し、ニーズに合わせた授業を組み立てるという学習者中心の教育が議論されるようになった。また、学習者のニーズだけでなく、学問上、職業上の特定の領域で使用される英語を多角的に研究するEnglish for Specific Purposes (ESP) が注目を集めるようになった。⁵⁾ このような一連の動きの中でとりわけ注目に値するのは、1998年(平成10年)に日本医学英語教育研究会(後に、日本医学英語教育学会へ改称)が発足し、ESPの領域の一つとして医学英語が研究されるようになったことである。そこでは、医師と英語教師が一同に会し、医学英語の教育方法が検討されている。特に、英語による研究発表、討論、論文執筆能力をいかに育成するかの議論が活発に行われ、その教育のための教材開発、教授法の確立、カリキュラムの作成などが行われている。他の学問分野に先駆けてこのような学会が設立されたことは、医学分野では実用的な英語の必要が特に強く認識されていることを示している。

以上のように、明治時代に導入された外国語の歴史を簡単に振り返ると、現在は、明治前期以来久々に手段としての英語が教育の現場で真剣に問われている時代と位置づけることができる。ただし、同じ手段としての英語であるが、明治時代の頃と現在とでは少なくとも二つの点で異なっている。一つは、明治時代に求められたのは学問を学ぶためのいわば情報受信の手段としての英語であったのに対し、現代の高等教育機関に求められているのは研究成果を発表するためのいわば情報発信の手段としての英語である。もう一つの相違点は、明治時代の英語教育が訳読を中心とした時間をかけることが可能な読解訓練であったのに対し、この時代に求められているのは英語による大量の情報を取捨選択し把握する能力、すなわち、走り読み(skimming)や拾い読み(scanning)をする能力の開発である。World Wide Web(WWW)の発達により、最新の研究成果がニュースとして世界を駆け巡り、専門家も素人も区別なく情報が入手できるようになった。インターネットを通じて専門的な知識を断片的に学んだにわか専門家が患者として病院を訪れる時代で

ある。専門家は、自分の研究を行うためにも、また患者との対話をするためにも、限られた時間の中で最新の動向を入手する語学力が必要とされている。

旭川医科大学の英語カリキュラム改革は、発信型の英語が重視され、インターネットを初めとしたマルチメディアを活用するための語学力が求められる時代に行われた。大学として教養を重視した英語教育を廃止し、専門性の高い英語を教育するという、前例が少なく、先進的なカリキュラムを組むこととなった。次節では、そのカリキュラム作成の際にどのようなことが考慮され、英語の教育目標を達成するために最終的にどのような授業編成となったかを紹介する。

2. 英語カリキュラム改革の内容

旭川医科大学の英語カリキュラム改革にあたっては、考慮しなければならないいくつかの問題があった。学部時代に履修すべき内容が激増する医学の分野では専門科目の授業が増えることがあっても、減らすことはできない。ニーズが高い英語であっても、カリキュラム全体の編成上、授業時間を増やすことは困難な状況である。同時に、単科大学であるがゆえに英語教育に携わることができる英語専任教官の数も限られていて、授業時間数の拡大はクラスあたりの受講者数をむやみに増やす結果につながる。このようなカリキュラム編成上の制約がある一方で、外国語学習の効果、学習者のニーズを考慮した場合、英語履修期間を拡大して学生が英語に触れる機会を増やすべきとの意見が出された。外国語に触れない期間があるとたちまちその能力は衰退していくのは学習者のだれしもが経験済みのことである。旧カリキュラムでは第2学年で英語の授業が終わり、それ以降は英語力が年々低下するという深刻な問題があった。さらに、授業内容に話題を向けるならば、どのようにして医学英語を教えるかという大きな問題があった。分野が細分化されている医学において、各分野共通に使われている英語が明確に存在している訳ではない。実際には、専門的な内容を学ぶためには各専門分野において使われている用語の習得が必要となる。幅広い内容を含む医学英語を特定講座の教官だけで担当することは極めて困難なのが実情であった。

これらの困難な状況下、まずは、学生の要望が高く、教官も必要性を感じている履修期間の可能な限りの延

長を優先的に考えた。そして、カリキュラム編成上の時間的、人的制約については、語学学習にはどのみち必要な学習者の主体性（自学自習、予習復習）を重視する授業内容に変更することで解決することにした。具体的には、旭川医科大学のカリキュラム全体で変更されることが決まっていた1コマあたりの授業時間数短縮（100分から60分）を英語科目にも導入し、その短縮分は自習課題を設定することで補うことになった。専門性の高い内容を教授する工夫としては、基礎、臨床医学の全講座の教官が医学英語の授業を開講し、学生のあらゆる興味関心に対応できるようにした。従来のカリキュラムとの新しいカリキュラムの編成を簡単にまとめると、表1. と表2. のようになる。

表1. 旧カリキュラム（1コマ=100分）

履修学年	科目名	履修時間	授業担当	学生数
第1学年	英語Ⅰ	週2コマ×30週	英語教官	25人
第2学年	英語Ⅱ	週2コマ×30週	英語教官	25人
第2学年	語学購読	週1コマ×15週	語学教官	15人

※語学購読は、英語・ドイツ語・ラテン語・日本語から1科目を選択※

表2. 新カリキュラム（1コマ=60分）

履修学年	科目名	履修時間	授業担当	学生数
第1学年	医学英語Ⅰ	週2コマ×30週	英語教官	25/50人
第2学年	医学英語Ⅱ	週2コマ×30週	英語教官	25/50人
第3学年	医学英語Ⅲ	週3コマ×15週	英語教官	15人
第3-4学年	医学英語Ⅳ	週2コマ×30週	医学教官	数人

履修期間は、旧カリキュラムでは、第1学年と第2学年でそれぞれ30週の合計60週であった（語学購読は英語Ⅱと平行開講であるため、英語選択の学生は後期の英語が週2コマから3コマに増えた）。それに対して新カリキュラムでは、英語教官による授業が、第1学年から第3学年前期までに75週、基礎、臨床医学の教官による授業が第3学年後期から第4学年前期までに30週、全体を通しての合計は105週に改められた。

1クラスあたりの学生数にも変更点があった。旧カリキュラムの英語Ⅰ、英語Ⅱ、新カリキュラムの医学英語Ⅰ、医学英語Ⅱは、それぞれ週2コマずつの開講であるが、1つは、外国人教師によるスピーキングとライティングを重視した授業（以下、能動型授業）、もう1つは、日本人教官によるリーディングとリスニ

ングを重視した授業（以下、受動型授業）の区分があった。旧カリキュラムではすべての授業において25人クラスであったが、新カリキュラムでは能動型授業に関しては25人の少人数を維持し、受動型授業に関しては、英語学習方略の講義、自習課題を重視する授業のため50人に変更した。新カリキュラムの第3学年から第4学年については専門性が強められ、細かな指導が必要となるために、可能な限り少人数とすることになった。

授業内容については、医学論文の読解能力の育成、医学の専門的内容を英語で情報発信する能力の養成を最終目標とするが、目標到達のために基礎的なことからスタートし、学年進行と共に段階的に専門性を高めていくことにした。授業内容を簡単にまとめると、表3. のようになる。

表3. 授業内容

授業名	受動型授業	能動型授業
医学英語Ⅰ	基本単語習得し、簡単なテキストの内容を目と耳で理解する。	短いエッセイを書く。日常会話を学ぶ。
医学英語Ⅱ	インターネット上の医療記事、簡単な医学論文を読み、健康関連のニュースを聴く。	論理展開に注意してエッセイを書く。設定されたテーマについてディスカッションできる。
医学英語Ⅲ	論文執筆の基本を理解する、口頭発表の基礎を身につける。	
医学英語Ⅳ	医学専門論文のレポート、プレゼンテーション。	

第1学年で展開される医学英語Ⅰの受動型授業では、医学英語入門という位置づけで、高等学校と大学の授業との橋渡しを図っている。医学・健康分野を話題としたテキストを使用して、医療、健康分野の基本単語を学び、読解力と聴解力の基礎固めをする。能動型の授業に関しては、学生が医学関連用語を十分に習得していないことを考慮して、一般的な内容を重視し、日常会話を中心に言葉のやりとりの方法を学ぶ。また、簡単なエッセイが自由に書けることを目標としている。第2学年で展開される医学英語Ⅱの受動型の授業では、専門的な医学英語の準備段階という位置づけで、マルチメディア（衛星放送、インターネット）を活用して、医療、健康分野のオーセンティックな教材を入手し、読解と聴解の訓練を行う。能動型の授業では、

医療分野のニュースや雑誌掲載記事などを素材に、プレゼンテーションの練習、文章の展開、段落の構造に配慮したエッセイの執筆を目指している。第3学年前期に展開される医学英語Ⅲでは、取り扱う素材についてはさらに専門性を高め、スピーキングとライティングを重視した授業を展開している。スピーキングについては設定された医学関連のテーマについて討論し、発表するための基礎力、ライティングについては医学論文執筆の基礎力を養成するにしている。また、英語を苦手とし、医学英語ⅠとⅡで十分能力を伸ばすことができなかった学生のために、リーディングやスピーキングの補強を重視した授業も展開して底上げを図っている。第3学年後期から第4学年前期に展開される医学英語Ⅳでは、基礎、臨床の各講座において、プレゼンテーションやディスカッションの演習、論文精読が行われ、その中で医学専門用語の習得が行われている。

新カリキュラムが導入されてから4年が経ち、本年度初めて医学英語の課程を修了する学生が出る。英語学習の継続性（履修期間の拡大）、自主性（自習課題の設定）、そして専門性（基礎、臨床教官による授業）を重視したカリキュラムへと改められたが、このようなカリキュラムの前例が少ないために試行錯誤の積み重ねという感も否めない。そこで、日本医学英語教育学会で実践報告し、そこで出される意見を参考にしつつ、毎年改善を行っているという状況である。⁹⁾次節では、早くも3年目を迎えることとなった医学英語Ⅱの受動型の授業についてその内容をもう少し詳しく見ることにする。医学英語の能動型の授業に関しては、本学外国人教師のサイモン・ベイリーが別稿で詳述しているので参照されたい。

3. 医学英語Ⅱ（受動型授業）の実践報告

医学英語Ⅱのリーディング、リスニングを重視した受動型授業は、特に、自主的英語学習の動機付けと、インターネットの発達で特に求められるようになった拾い読みと斜め読みの能力の開発に力点を置いている。使用する教材は、医療、健康分野のニュース番組、新聞や雑誌の記事からスタートし、最終的には医学生向けに書かれた専門誌の中から、医学の一般的内容に触れた論文である。ここまで到達することで、医学英語Ⅲ以降のより専門的な医学英語論文の読解、論文執筆

の基礎力養成といった目標への橋渡しとしている。授業内容は、新カリキュラム開始当初に比べ、学習方法に関する講義、演習の際の注意説明に割く時間が多くなってきている。この節では、そのような変化の背景と具体的な指導内容に触れた後、学期末に行われた授業に関するアンケート調査をまとめ、学生の受け止め方について概況を報告する。

講義中心の授業に移行しつつある背景は、臨床医学の先生に「最近の学生は英語が読めなくなった」との話が頻繁に耳にすることが動機となった。英語が読めないだけでなく、そもそも英語の論文を読もうとしない、と話す先生もいる。この問題は、英語に限らない読書習慣の欠如、文字言語よりも音声言語を重視する英語教育の最近の傾向、英語力そのものより問題を解く際のテクニックを重視した受験英語の存在など、生活習慣や教育制度全体に密接に関係しているように思われる。授業の中で実際に観察されることに話題を絞るならば、学生が英語を読めない原因としては、二つのことが考えられる。一つは、英語を目にする量が少ないことから生じる文字離れ、もう一つは、英語を和訳することだけに神経を使い、文章の意味を考えないことから生じる、思考プロセスの欠如である。学生は1-2ページ程度の文章はどうかこなすものの、それより長い論文は敬遠する傾向が強いと思われる。

この文字離れの傾向を確かめるために、医学英語Ⅱを受講する学生（93名）に対して普段英語を目にする量について2002年4月にアンケート調査を行った。「英語で書かれた本を読んだことがあるか？」との質問に対しては、86名から以下のような回答が得られた（薄本と厚本の両方を読んだ学生は厚本に、厚本と専門書を読んだ学生は専門書の項に分類した）。

表. 4 「英語の本をどのくらい読んだことがあるか？」

全くない	100ページ以下の薄本		100ページ以上の厚本		専門書	その他
	3冊未満	3冊以上	3冊未満	3冊以上		
20名	26名	7名	17名	2名	6名	8名

英語の本を読んだことがない学生は実に20名（23.3%）に上った。1-2冊の薄本を読んだ学生は26名（30.2%）であるが、そのほとんどが高等学校の授業で使用した副読本を指している。同じく、1-2冊の厚本を読んだと回答した学生17名（19.8%）についても、読んだのは高等学校で使用した副読本と答えてい

る学生がいた。自ら本を読んだ学生は、薄本3冊以上の7名(8.1%)、厚本3冊以上の2名(2.3%)、専門書を読んだ6名(7.0%)、合計15名(17.4%)のみである。その他の8名(9.3%)については、どのくらい読んだのか不明、本ではなく雑誌を読んだ、との回答であった。以上の結果から、半数以上の学生がある程度まとまった英語を一気に通読するという経験を持っていない様子がうかがえる。

大学入学以降は、情報処理演習室のコンピュータを利用した授業もあり、インターネットを自由に使うことができる。そこで、「英語で書かれたインターネットサイトを閲覧したことがあるか?」との質問をしたところ、次のような回答が得られた。

表5. 「英語で書かれたインターネットサイトを閲覧したことがあるか?」

全くない	不定期	定期的	無回答
54名	27名	4名	1名

英語のインターネットサイトを見たことがない学生は、本を読んだことがない学生より大幅に増え、54名(62.8%)にも上った。不定期だが見たことがあるとした学生は、わずか27名(31.4%)であった。定期的に閲覧していると回答した学生は、4名(4.7%)でほとんどがスポーツ関連のサイト閲覧であった。この質問については1名が無回答であった。学生にとって利用の機会が多いと考えられるインターネットにおいても英語を使用する機会が極めて少ない状況である。

以上のアンケート結果からも分かるように、学生が日頃英語を目にする機会は極端に少ない状況である。そのような状況を反映してか、これまで医学英語Ⅱを受講した学生の中には、演習で使用する教材に関して、長文の英語は面倒であるとの感想を漏らすものも多数いた。さらに、課題として読む記事や論文を自由選択にしたときには、内容の難易度、興味関心の度合いを全く考慮せずに、文章の長さだけで決める学生が多かった。

学生が英語を読めない要因は、このように文字を毛嫌いするだけでなく、文章内容の理解を心がけない姿勢にもある。例えば、記事、論文のある段落について、それがどのような内容かを質問すると、英文を丁寧に

和訳する学生が実に多い。和訳を終えて後、その文がどのような内容であったのか再び質問しても、和訳を繰り返すか、分からないと答えるのがお決まりのパターンとなっている。英文を日本語にまとめる要約問題を課した場合、文章全体から適度に英文を抜き出し、それを和訳の上、箇条書きにだけという解答が多い。文章全体の意味を考え、自分なりの言葉で端的にまとめるというプロセスを経た解答はごくごくわずかである。

英文字に接触する機会の貧困と、意味内容を考えるプロセスの欠如という問題を抱えつつ、この節の冒頭で述べた授業の目標を達成するために、授業では、学生にとって親しみのもてるメディアであるインターネットの積極的な活用と、文章全体の内容理解を踏まえた上での要約演習を重視している。

まず、インターネットの活用では多量の英文に触れることで英語の文字への抵抗感をなくすようにしている。実際には、WWW上にある医学関連サイトを取り上げ、学生が定期的に関覧できるお気に入りサイトの発掘(自主的学習の動機づけ)と、日々更新されるニュース、論文を上から下まで読み通す訓練(斜め読みと拾い読みの能力開発)を重ねる。使用するサイトの一例を挙げると以下の通りである。

- New York Times:College
(<http://www.nytimes.com/college/>)
- Web MD (<http://www.webmd.com/>)
- Student British Medical Journal
(<http://www.studentbmj.com/>)
- Western Journal of Medicine
(<http://www.ewjm.com/>)
- Medscape (<http://www.medscape.com/>)
- Science (<http://www.sciencemag.org>)

これらのサイトに掲載された英文を読む際には、リスニング力の向上も兼ねて記事の内容と平行する英語ニュース番組を視聴すること、比較的平易な英文で書かれた関連記事を提供することで読解に欠かすことができない背景知識の確認、その分野の基本英単語の習得を行っている。最近の研究動向を知ることができるという点で学生の知的好奇心を満たし、なおかつ英語の文字に数多く触れるという意味では、利用するサイトの選択さえ間違えない限り、インターネットは実に

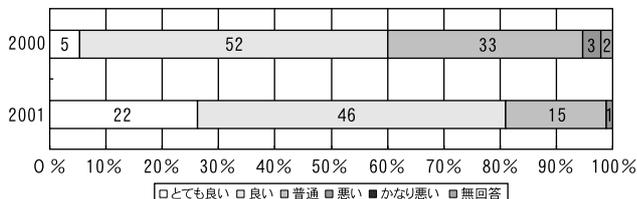
有用なメディアである。

このようなサイト閲覧だけでは、学生の英文理解にはつながらず、ましてや、医学英語Ⅱの最終目標である、医学論文読解、執筆の橋渡しをすることは困難である。そこで、多数ある記事の中から、読むに値する記事・論文を選び出し、文章の論理構造、展開に注目し、文章の組み立てに関する講義をしている。その中で、個々の文章の和訳だけでは、文章を理解したことにはならないこと、文章を要約するためには文書要約ソフトのように各段落の抜き出しただけでは不十分であることを解説する。学生は、自習課題として出される要約演習を重ねることで、その講義内容を次第に理解し、1年かけてようやく文章を理解した上での要約ができるようになる。

以上のようにして展開された授業について、学期末に授業の総評(図1)、課題の量(図2)、課題の難易度(図3)、授業内容の将来の有用性(図4)を質問するアンケート調査を行い、学生の受け止め方を調べた。アンケートは匿名とし、回答は5つの選択肢から1つを選び、補足がある場合には自由記述する方式で行われた。2000年度は95名全員、2001年度は93名のうち84名の学生から回答が得られた(学期初めのテストで一定水準を超えた9名は84名とは異なる課題に取り組んだ)。図1~図4に示されたグラフは、いずれも、縦軸が授業年度、横軸が回答の割合、グラフ内の数字は回答者の人数である。

まず、最初の質問は、医学英語Ⅱ(受動型授業)の総評を尋ねた。「かなり悪い」とする学生は2年連続皆無であり、良いとする学生は、2000年度の6割から2001年度の8割に改善された。

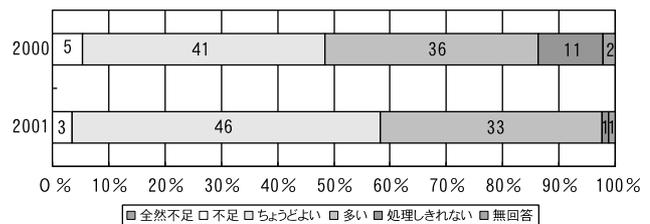
図1. 授業を総評すると



良いとした意見の中には、メディアを活用していること、個々の和訳にとらわれずに全体の意味を理解する点、課題があったために必ず英語に触れることができた点などを自由回答欄に書く学生がいた。悪いと回答した学生は、レベルが高すぎる、毎週の課題はきつかったという内容であった。

二つ目の質問は、毎週課せられたニュース記事、論文を要約する自習課題についてその分量を尋ねた。2000年と2001年の両年ともに、課題量が全く足りないと回答する学生は皆無であった。2000年度は約5割の学生は課題量が多いと答え、2001年度も依然として約4割近くもの学生が多いと感じている結果となった。

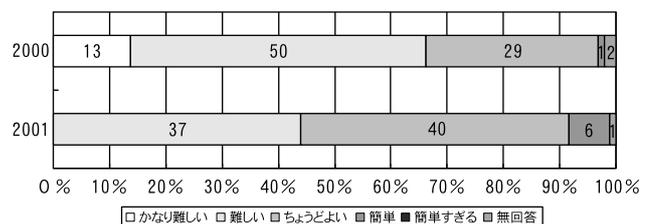
図2. 課題の量



2000年度において負担を感じる学生が多かったため、2001年度は課題内容を一部、要約から単語調べなどに変更するなど内容を軽めにした。自由記述の欄には、毎週は正直辛いですが、課題でなければ勉強しないので課題は出して欲しい、という内容の意見が複数寄せられた。

三つ目の質問は、ニュース、論文など課題として取り上げる英文の難易度を尋ねた。背景知識や基本単語の確認が少なかった2000年度は、6割以上の学生が難しいと回答した。その反省に基づきある程度の解説を加えた上で課題を出した2001年度は、かなり難しいと回答する学生は皆無で、難しいと回答する学生は4割程度に止まった。

図3. 課題の難易度

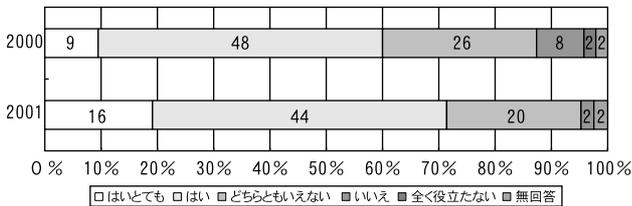


自由記述の欄には、難しいが大学の授業としてはこのくらいのレベルが必要、難しいが簡単にするとやる気が失せるなどと、難しい内容に肯定的な意見が複数あった。2001年度の学生には、課題、面倒だが要約にした方が実力向上につながるという意見があった。

四つ目の質問として、履修内容が今後の英語学習、

将来の職業、研究に役立つか否かを質問したところ、次のような結果となった。2000年度は6割、2001年度は7割の学生が役立つと回答した。2000年度にいた全く役立たないとした学生も、2001年度には皆無となった。

図4. 将来に役立つか



2000年度と2001年度とでは、授業内容について一部改善を行なわれたが、ほぼ同様の形式で進められ。それにも関わらず、履修内容の有用性については、学生の受け止め方が異なる結果となった。2001年度に役立つと考える学生が1割程度増え、全く役立たないという学生が皆無であったのは、学期当初に授業の位置づけと実用性について解説を行ったことも一因である。菱田、大木(2000)の「卒業後の医学英語使用の実態」を参考にしつつ、⁷⁾より具体的に英語学習の必要性を説き、動機付けを与えた。それに加えて、教える側が新カリキュラム2年目となり、新しい形式に慣れたという点も考えられるだろう。

旭川医科大学の新しいカリキュラムでは、英語学習の継続性、学習者の主体性、履修内容の専門性を重視したが、医学英語Ⅱの授業内における学生の反応を見る限り、概ね好評のようである。ただし、英語の教育目標を達成するためにどの程度貢献しているのかの調査研究が今後の課題である。母国語に関しては、読書量を増やすこと、要約訓練を重ねることが直接作文能力の向上に結びつくことが分かっているが、外国語については、その相関関係がはっきりと解明されている訳ではない。^{8), 9)}このような課題に加えて、学生からの改善要望としては、医学以外の内容についても授業で取り上げて欲しいという意見がある。限られた授業時間内で幅広い内容を扱うことは困難であるため要望に応えることができないているが、教養を高め、実力をつけるためには、種々雑多な英語に触れる必要があるのは明らかである。次節では、その教養の問題を取り上げて、本稿を閉じることにする。

4. 教養としての英語の必要性

旭川医科大学の英語カリキュラム改革は、教養重視から専門重視へ転換を果たした。その成果については今後評価検討していかなければならないが、現時点で既に課題として考えられるのは、前節の終わりに触れた教養としての英語である。この問題を考えるに当たり、英語の達人として知られ、明治時代に国際舞台上で活躍した新渡戸稲造の言葉を参考にしたい。次の引用は新渡戸が東京大学に入学する際、文学部外山教授と交わしたやりとりである。¹⁰⁾

「英文やつて何します、僕は笑いながら「太平洋の橋になり度と思えます」と云ふと、先生獨特の軽々しい調子で、少しく冷笑的に「何の事だか私は解らない、何の事です」、其所で不得止説明して、「日本の思想を外國に傳へ、外國の思想を日本に普及する媒酌になり度のです」と述べた。

この発言をした新渡戸は、既に、東京外国語学校を卒業し、授業がすべて英語で行われていた札幌農学校を卒業していた。そのことから相当の語学力を身につけていたと考えられている。²⁾新渡戸の目標は農政学の研究であり、英文学の研究ではなかった。英文の原書を独自に入手して読破していた彼は、東京大学を一年で見切りをつけ、ジョンズ・ホプキンズ大学へと留学をした。そして37歳のときに名著*Bushido, the Soul of Japan*を執筆し、日本人の心を欧米人へ伝えることになる。晩年の著書では次のように述べている。¹¹⁾

言語の練習のみに心を用いて思想も知識も養わないならば、言語はかえって邪魔になる。

彼が意図しているところは、教養を兼ね備えた上で語学の練達こそが、コミュニケーションには必要だということである。

国際学会でのパーティー、留学先での同僚との付き合いなど、人的交流がされることで、良い研究が育まれるとの話を耳にする機会は多い。その人的交流において必要なのは、医学英語を駆使できることではなく、教養に根ざしたコミュニケーション能力である。その教養の重要性を語る場が必要ではなからうか。大綱化

以前に広く行われていた「教養英語」は、高等学校卒業時の英語力を低下させるばかりで、およそ役に立たないと揶揄されてきた。その反省を踏まえて、役に立つ教養をと何か、それをどのような場で、どのように伝えるか、専門重視の教育に従事しつつも、今後の課題として真剣に考える必要がある。

(参考文献)

- 1) 永盛一：英語の教育、大修館。1983.
- 2) 斎藤兆史：英語達人列伝、中公新書。2000.
- 3) 松村幹男：明治期英語教育研究、辞游社。1997.
- 4) 大崎仁：大学改革1945～1999、有斐閣選書。1999.
- 5) 寺内一：ESP理論と実践、第1章ESPを知る、三修社。2000.
- 6) 内藤永：World Wide Webを活用した読解演習－医学英語への導入、Journal of Medical English Education, 46-49, 2000.
- 7) 菱田治子、大木俊夫：卒業後の医学英語使用の実態－卒後9、16、19年間の医師の医学英語使用状況（浜松医科大学の場合）、Journal of Medical English Education, 49-53, 2000.
- 8) Krashen, Stephen. D. : The Input Hypothesis: Issues and Implications, Laredo Publishing, 1985.
- 9) Belcher, Diane and Alan Hrvla (eds.) : Ling Litereacies: Perspectives on L2 Reading-Writing Connections, the University of Michigan Press, 2001.
- 10) 新渡戸稲造：歸雁の蘆、弘道館。1907.
- 11) 新渡戸稲造：東西相触れて、実業之日本社。1928.

The English Curriculum Reform in Asahikawa Medical College: From General English to Medical English

NAITO Hisashi*

(Abstract)

Asahikawa Medical College has completely reformed its curriculum for medical students since 1999. This report outlines the details of the recently implemented English curriculum, including summaries of historical context and implications, and educational goals and purposes, along with student feedback. It emphasizes that the introduction of Medical English, an aspect of English for Specific Purposes, is a progressive and practical approach for developing skills in literacy and oral presentation, both of which are required for medical study and practice. Although there is less emphasis on General English in the current curriculum, the students may still require extensive knowledge of the language in order to communicate more effectively in their profession.

*Department of English, Asahikawa Medical College